

流通視点からみた新たな政策課題 —原木市売市場の分析から—

下田 佳奈（京大農）

はじめに

「森林・林業再生プラン」では、安定的・効率的な流通システムの構築や、物流・情報流の両面における各主体の連携の必要性について言及されているが、総じて、増産すれば輸入材のシェアを国産材に代替できるとの思惑が強い。さらに、「国産材の加工・流通・利用検討委員会」では、効率的な流通体制整備の一環として、中間土場の整備や木材搬出のための大型トレーラーの活用、路網の整備が提唱されているが、「新生産システム」を引き継いだ政策となっている。何れも、国産材流通の現実に踏み込んだ具体的な政策とはなっていない。何より、国産材供給が増えた場合の向かうべき流通チャンネル、ひいては摺むべき需要を明確にする必要がある。

1 研究方法

国産材製材において、新設の大型工場はじめ在来の小規模工場に至るまで、原木市売市場からの原木調達への比重は大きく、未だ市売市場から得られる情報量は多い。しかし、市売市場の構造とりわけ極仕訳や買手間のシェアに大きな変化があり、市場の役割（「市場の競争構造」）は大きく変化した。本研究では、市売取引のデータ分析（茨城県森連・大宮共販所）によって、国産材流通の現状からみた政策課題を明らかにしたい。

2 結果と考察

(1) 市売市場における取引については、1990年代から2000年代にかけて、取引極の規模の拡大、取引単価の幅の縮小といった変化がみられた。主要な買手の入れ替わりも起こった。スギ 3m20-30cm を中心に、一極の規模が 50 m³ を超える極も多数みられ、こうした大規模極での取引が市場取引の中心を占めている。

(2) 大口の買手は大規模取引極を活用した原木調達を行っているが、買手ごとの購買内容に着目すると、それぞれの買手は、特定の種類の極（樹種、長さ、径級）を集中的に購入する傾向がある。

(3) しかし他方で、小規模極を購入する買手も依然として多数存在している。

以上のことから、市売市場は従来以上に、買手のニーズに合わせて原木の仕訳、取り揃えを行う機能を重視されるようになってきている。同時に、原木の在庫機能も果たしている。原木市売市場を経由せずに中間土場を活用する場合であっても、原木の仕訳を行い、必要に応じて原木を取り揃え、適宜提供できるように在庫を行う機能を、流通のいずれかの段階が担う必要があることに留意する必要がある。

こうした市場構造の変化やその背後にある製材工場の変化への対応策として、今後、市売市場の再編を通じた新たなストックヤードの形成も視野に入れる必要がある。

（連絡先：下田佳奈 kn_shimoda@yahoo.co.jp）